

# 随泉寺寺報

平成18年(2006年) 11月号 第435号

TEL082-892-0217 <http://www.zuisenji.com/>

浄土真宗本願寺派 高峯山随泉寺

後期門信徒講座

講師 源光寺住職 安長 照眞師

講題 「み教えに会う」

『ぬれてほす 山ぢの菊の つゆのまに

いつか千とせを 我はへにけむ』(古今273) 素性(そせい)

【通釈】菊の露に濡れては乾かしつつ行く山道——その「露の間」ではないが、  
いったいいつの間に千年を私は過ごしてしまったのだろうか。

一年たつのは早いものです。しかし待っているとなかなか経ちません。過ぎる時間はなぜ早いのでしょうか。待つ時間はなぜ遅く感じるのでしょうか。現代は待つことを忘れた時代といわれます。早いことがいい事で、車も早く、電車も速く、牛井の出来上がるのも早く、スーパーのレジも早いほうがいいのです。

【時は金なり】ということわざもあるように、時間は大切です。しかし時間だけがすべてでしょうか。忙しい、忙しいでわれを忘れて空しく過ぎてゆく、時計に追い立てられた一生は、本当に生きたことになるのでしょうか?じっくりと時間をかけて育てて行く、そんな生き方もあるのではないのでしょうか。気が付いてみたら、はや千年過ぎてしまったというのもうらやましい気がします。

## 11月の法座予定

11月 7日～15日……………菊花・絵画・作品展

11月 12日……………掃除 平原西

11月 14日昼席午後1時より……………後期門信徒講座

11月 14日夜席午後7時半より……………出張法座 平原正子氏宅

11月 15日朝席午前10時より……………役員研修会 芋煮

11月 15日昼席午後1時より……………後期門信徒講座

12月 2日午後……………門信徒会本部役員会・忘年会



## ☆菊花・絵画・作品展

菊花・絵画・作品展を開催します。今年は絵画だけでなく、陶芸や木彫、刺繍・絵手紙なども、歓迎です。出品される方は7日の午後にお寺まで持ってきてください。

菊の花は一年を通して世話が必要です。以前に井原の浜野さんに菊の花の育て方をお話していただいたことがあります。その時感じたことですが、菊の花を育てるのは、人間の子供を育てるのと同じことだと思いました。

愛情を持って育てねばなりません、あまり過保護になるとうまくいきませんし、ほっといてもいけません。しかし一年中目は離せないことです。手間がかかることです。さて、次のような俳句があります。

『幾たびか お手間かかりし 菊の花』 加賀のちよ女

きくのはな 菊は聞くのかけことば

### 聞く力

真に人を動かすことができる力は、「話す力」ではなく、もちろん腕力でもなく、唯一、「聞く力」です。

精神科医のカーネギーは、その有名な本の中で、こう述べています。

「もし、あなたが、重要な頼みごとがあつて、人を訪ねたとするならば、1時間の面会時間のうち59分間を、相手の人の話を聞くために使いなさい。そして、帰り際の1分間だけ、あなたの頼み事を話しなさい。そうすれば、必ず聞いてもらえるでしょう」と。「聞く力」は人を受け入れる力です。親身になって話を聞くことによって、初めて、人の心の扉は開かれます。心の扉が閉じている間は、百万言の言葉を用いても、何も伝わらない。人の心を動かすことはできない。多すぎる言葉と一人よがりな熱意はかえって反発を生むだけです。人の心の扉は、唯一、きいてあげることによってのみ開かれる。

しかし、たいてい人は、その逆をやっています。自分が聞いてもらうことが先に立って多くの軋轢を生み出し、聞いてもらえなかったことに絶望する。話し方教室は巷にあふれているが、「聞き方」教室なるものは存在しない。何故なら、それは教えることができない技術だからです。人間としての包容力、容を大きくする以外に、「聞く力」を高める方法はないからです。

## ☆役員研修会

役員研修会を開催します。気持ちはあつてもなかなかお寺に参ることは出来ません。私も20年ぐらい前にある勉強会に参加していました。興味があつて自分から参加したものでしたが、何回か欠席をしたら、行きにくくなりました。久しぶりに出席をしたら、たまたまジャンケンで負けて、修了式の役員になってしまいました。仕方なしに都合をつけて修了式を終えました。おかげでそのまま、その勉強を、今でも続けることが出来ました。考えてみると、あの時ジャンケンで負けてよかったなあとおもいます。縁とはそんなことです。今年には仏教を勉強する年と思つて参加してください。

## 11月カレンダー 東井義雄

### この不思議ないのち

### それを今 生きさせてもらっている

私は四十年間「教育」の仕事にたずさわらせてもらってきました。そして、今も、大学の講義に出させてもらっているのですが、近ごろ、私のやっていたことは「教育」になっていたのだろうか、はずかしい思いでふり返らせてもらっているのです。

熊本県に徳永康起という先生がいらっしゃいます。三十三歳で校長に抜擢されながら、自ら希望して平教員に降格され、八年前退職され、今も問題少年たちのために献身的な仕事を進めておられる先生です。次のは、その徳永先生のご講話の中の一節です。

昭和十九年五月十二日、ニューギニアのポーランジャの空中戦で戦死した生徒がおります。若冠十九歳でした。この生徒は、兄さんがすばらしく頭がよく、いつも家で比較されて、偏愛の中で冷たく育てておりました。学用品を買うのにも「馬鹿タレ、勉強もできんものが、何を金が必要か」と叱られるのです。それが恐くて、ある日、彼は友人の切り出しナイフを盗みました。

教室で「今朝買ってきた切り出しナイフがなくなった」という生徒の訴えを聞いてヒヤッとしました。「あの子ではなからうか」と暗然といたしました。生徒を外に出して調べてみると、実の如く、桐の柄がついて、桐の蓋が三角形についているあのナイフを、外側は削って墨を塗っているけれども、鞘を抜けば新品の切り出しナイフが彼の机の中にありました。私は、すぐその足で自転車を飛ばして金物屋に行き、それと同じ物を、失くした生徒の机の奥に入れておきました。

やがて、教室にはいつてきた生徒に「君はあわて者だから『なくなった』なんがいうが、よく調べてみるんだね」というと、机の奥の奥から切り出しナイフをさがして「先生、ありました、ありました」と喜びました。そのとき、教室の一隅から、うるんだ眼で私を見ておったのが、昭和十九年五月十二日、空中戦で亡くなったその生徒でした。



彼は、死の前日、手紙を書いて私に送ってくれました。「明日は、ポーランジャの空で僕は見事に戦死できると思います。その前にたった一言、先生にお礼を申しあげたい。あの時に、先生はなんにも言わないで僕を許してくださいました。死の寸前になってそのことを思い出して『先生ありがとう、つごぞいました』とお礼を申し上げます。どうぞ先生、体を元気にして、僕のような子どもをよろしくお願いします」というのが絶筆でした。

私は、私が彼と同じ境遇におかれたら、これ以上の荒れ方をするだろうと思ったときに、どうしてあの子を怒ることができたでしょう。今、彼の墓前には、私が植えた八重クチナシが大きく育てております。(後略)

教育というしごとは、ひとりひとりの子どもに対する徳永先生のような深い人間理解と愛によって「教育」になっていくのでしょうか。

### おかげさまで

プロ野球『楽天イーグルス』野村克也監督の著書(『野村ノート』)に『おかげさまで』という詩が紹介されています。

おかげさまで

夏がくると冬がいいという、冬になると夏がいいという。  
太ると痩(や)せたいという、痩せると太りたいという。  
忙しいと閑(ひま)になりたいという、閑になると忙しいほうがいいという。

自分に都合のいい人は善い人だと誉め、自分に都合が悪くなると悪い人だとけなす。

借りた傘も雨があがれば邪魔になる。

金をもてば古びた女房が邪魔になる。

世帯をもてば親さえも邪魔になる。

衣食住は昔に比べりや天国だが、

上を見て不平不満に明け暮れ、隣を見ては愚痴ばかり。

どうして自分を見つめないか、静かに考えてみるがいい。

いったい自分とは何なのか。

親のおかげ、先生のおかげ、世間様のおかげの塊(かたまり)が自分ではないのか。  
つまらぬ自我妄執を捨てて、得手勝手を慎んだら、世の中はきっと明るくなるだろう。

おれがおれがを捨てて、おかげさまでおかげさまでと暮らしたい。

